Osaka University Knowledge Archive

Title	太宰治文学における読者像
Author(s)	David, Michael RamirezII
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58815
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	David Michael RamirezⅡ
本籍(国籍)	
学位の種類	博士（日本語・日本文化）
学位記番号	甲 第　８５　号
学位授与年月日	平成１９年９月２６日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	太宰治文学における読者像
論文審査委員	主 査 教 授 尾 上 新太郎
	副 査 教 授 奥 西 峻 介
	副 査 准教授 真 嶋 潤 子
	副 査 教 授 嶋 本 隆 光
	副 査 教 授 米 井 力 也

論文の内容要旨

この論文には二つの目的がある。第一章の中において、アメリカにおける太宰治研究の解明と分析についての論があげられている。そして、第二章から第六章まで、太宰文学における読者像という独自の問題についての分析がある。

第一章の中において、まず、「太宰治」という作家は、アメリカ・英語圏の中に、どのように紹介されたのか、又、どのように理解されているのか、という問題について論じている。構成として、アメリカ・英語圏における太宰治研究の1950年代のはじまりから現在までの発展と経緯を見ている。

主に、そのアメリカにおける太宰治研究は、二つの問題に分けることができる。一、太宰治文学と太宰本人に対する研究と批評と、二、太宰治文学の翻訳という二つの問題がある。この二つの問題が、五十年に渡って論じられ、ドナルド・キーンと、エドワード・サイデンステッカーによる翻訳からはじまる。この二人が太宰治文学における名作を誰よりも逸早く翻訳した。『人間失格』と「おさん」又、「ヴィヨンの妻」『斜陽』の英訳が出版された。彼らのこれらの作品を翻訳した1950年代において、問題として指摘されることは、まず、太宰治の作品の数が限られる、ということである。サイデンステッカーとキーンの時代では、アメリカの批評家が太宰について論じようと思っても、その論の基本となる英訳の基礎が無い、という苦情がある。

この1950年代から、太宰の作品における絶望は、太宰本人の気持ちであるという解釈があげられている。まず、太宰の才能は、その『御伽草子』と、それから、『新釈諸国話』にあらわれているという評価がある。これらの短編群において、原作のユーモアが見事に

引き出されているというのである。又、太宰は一人称で書く作家である、という解釈がある。それから、太宰は、孤独と絶望を描いたという説明がある。キーンと、それから、これらの評価はアメリカ・英語圏における太宰治研究の基本的な意見となる。その他に、太宰における研究を描いた研究者として、Makoto Ueda と David Burdony, がいて、彼らの研究も太宰についての論を続けているが、太宰の自伝と、それから太宰文学の翻訳を本格的には取り上げていない。ここでは、これらの輪文の基本的な意見について触れて、彼らのアメリカ・英語圏における太宰研究の成果について論じている。

だが、1970年代に入ると、太宰治における翻訳の詳しい自伝とそれから、作品の翻訳は、James O'Brien によって行われる。まず、O'Brien は、太宰の自伝を描いてから、太宰の戦後・後期文学以外の作品を数多く取り上げている。まず、その太宰の自伝に触れ、彼は太宰の人生と、それから太宰の作品が同じようなものである、という理解を示している。だが、この太宰の人生と、それから太宰の文学の差が後の Phyllis Lyons の研究のテーマになる、ということを私は説明している。

1970年代に、太宰治の O'Brien の太宰治文学とその自伝の解説が出版されてから、今度、1985年から、Phillis Lyons が真正面から、太宰本人の人生と太宰治文学の内容の違いを取り上げている。

1980年代において、太宰治文学の英訳の数が急激に増え、O'Brien と Lyons、それから太宰治文学の研究者ともいえる人達と、それからもう一人、James Westerhoven の翻訳がみられる。

1990年代において、新しい翻訳がでてくるだけではなくて、既に訳されたものが再び、別の翻訳者、Ralph McCarthy によって翻訳されている。ページ数と、その英訳の数で彼は誰よりも太宰治の作品を約した人となっている。もう既に、太宰治についての情報と研究が行われており、McCarthy の太宰治文学の短編集は、単純な翻訳でもなく、純粋な研究でもないにもかからず、英語で簡単に太宰治の文学とその本人の生活について知るために非常に有意義な作品となっている。

1990年代は、翻訳以外にも、大きな太宰治研究における変化が起こった。太宰の文学におけるロマンスとして、自殺と絶望が、Alan Wolfe によって取り上げられている。彼の研究において、太宰が一般社会から疎外された芸術家であるという定義は、一つの虚構であり、日本と又アメリカにおける文学論の結果にすぎないと、彼は指摘している。この指摘の中に、特に、J. Thomas Rimmer、Phillis Lyons, Masao Miyoshi と、David Burdony との大きな違いがある。それは、太宰が暗い絶望を描いても、その絶望と暗さが客観視されるということである。これは Wolfe の論の主な特徴と成果であると私は指摘している。

もう、Alan Wolfe の研究以降、太宰の文学がただ輸入され、英語圏の読者に紹介されるだけではなくて、太宰文学のイメージが疑問視され、再検討される文章が多くなる。1998年に、今までのアメリカ・英語圏における太宰治文学の解釈を完全に覆す研究として、Joel Cohen の太宰文学におけるユーモアについての研究がある。この研究でアメリカにおける

太宰治研究の中に、太宰文学における暗さと絶望以外のものがあるとことが本格的にいわれるようになったと私は指摘している。

それから、一番新しい太宰治研究として、Reiko Auestad が2002年にライデン大学から近代文学と、近代日本の歴史をみながら、太宰の左翼的な姿勢を取り上げている。彼女の研究は、太宰治文学におけるロマンスに対する批判とも考えられ、アメリカにおける太宰治研究の最新作と考えられる。

これらにおける研究の問題点と傾向として、アメリカ・英語圏における太宰治研究は多くの場合、基本的に日本の研究に依存する傾向があり、ここで指摘した太宰治文学に対する批評は、基本的に、80, 年代の相馬正一の研究に由来すると、私は指摘している。要するに、このアメリカにおける太宰治研究において、その研究の枠と構成が若干異なっているにもかかわらず、その太宰治に対する基本的な情報は生産されているのではなくて、輸入されているわけである。一方、その太宰治文学に対する大きな成果として、その太宰文学におけるさまざまな作品の翻訳があるとも、私は結論付けている。

続いて、第二章から太宰文学における読者像という問題を取り上げている。読者像を順番に、太宰文学の前・中・後期の作品をみながら解明している。

第二章の中に、太宰の『晩年』の短編集から太宰文学における読者像を紹介している。

太宰文学において、読者という人物は、既に、前期太宰文学においてあらわれているということを指摘し、その読者像の根本的な問題として、まず、その読者の作家太宰の自伝との関係があり、そして、根本的にこの読者像に底流している問題は、その知的な悩みと、作家活動に対する自負と苦労であると、私は論じている。その背景に、太宰の混乱した作家生活があり、又、その作家としての名声のための葛藤があるとも論じている。

次に、第三章の中において、「葉」「ランクの歌留多」「二十世紀旗手」「HUMAN LOST」「畜犬談」「富嶽百景」と、「魔笛と葉桜」、又、「駆込み訴へ」に沿って、太宰の読者像における変化を指摘している。まず、その読者は、作家的な存在から独立する。だが、この同じ読者である人物が、作家というものを客観視するものとして使われている。この変化の裏に、太宰の武蔵野病院事件と、それから、その後の小山初代との離婚という太宰本人の生活における変化があるとも論じている。特に、これらの作品の中において、読者に対する描き方が改善したことに伴い、その真剣な作家活動への復帰があるとも論じている。

第四章の中において、太宰治文学における中期作品の中に、太宰の作家生活において作家への回帰があらわれていることを論じている。その延長線上に、その読者の人物達の用途における変化と共に、より完成した、読者の内面からの描写が、「きりぎりす」「女生徒」「千代女」、そして、「風の便り」の中にあらわれていると、私は詳しく論じている。

第五章の中において、「庭」「親友交歓」「苦悩の年鑑」「冬の花火」『斜陽』そして「父」という作品を取り上げながら、戦後という社会変化と共に現れた文化的な活動に対する絶望が太宰の作品の背景の中にあらわれていると共に、その読者という人物の扱いと構成が再び変化すると論じている。

最後に、第六章の中において、「ヴィヨンの妻」「おさん」「父」「トカトントン」『斜陽』とそれから、「如是我聞」を通して、結局、太宰文学の中において描かれている読者像とは、その作家太宰治の形成のために利用された人物であり、太宰文学における一種の閉鎖的な桃源郷という空間を構築するために利用されたものにすぎないと、私は結論づけしている。その読者的な人物の中に、すでに、作家太宰によって表現されている芸術論や読者論があらわれていると指摘し、その上に、その読者とは、ただ、その芸術論をその人物の内面から描写したり、表現したりするための道具であったとも指摘している。最終的に、その読者によって、その文学上の作家太宰のイメージと芸術論を表現することで、太宰文学において、彼は完全な物語の空間を成し遂げたとも評価している

論文審査の結果の要旨

本論文は、内容的に言って、二つの部分に分かれる。一つは、アメリカ・英語圏における太宰治文学の受容の歴史に関する研究である。他は、太宰治文学における読者像に関する研究である。

まず、前者に触れる。第一章がそれに当たる。論者は、アメリカ・英語圏における太宰治文学の受容を、翻訳と作者論・作品論、の二面に分け、考察している。１９５０年代、太宰治作品の翻訳が始まった。作者論・作品論は、それに続いた、と言っているが、太宰治に関する作品論・作者論の特徴として、日本の太宰治研究者の影響が大きいことを指摘している。つまり、日本の研究の輸入が主と言うのである。アメリカ・英語圏における太宰治受容の特徴を鋭く指摘しているものとして、評価される。

ただし、それなら、そういう点から、アメリカ・英語圏文化の特徴を追及するという問題意識もあってよかったのではないか、という意見も、審査委員の中から出された。

第二章から第六章までは、太宰治文学における読者像、に関する研究である。こちらが、本論のメインである。

第二章においては、前期・太宰治文学における読者像を問うている。前期・太宰治文学とは、ほぼ、二十代後半の太宰治文学のことであり、問題にしている作品は、第一創作集『晩年』中の、「列車」「思ひ出」「猿面冠者」等である。この時期の太宰文学における読者は、一方的に、作家・太宰治に隷属しているものとされる。そして、現実の太宰治は、作家・太宰治のイメージを、逆境の生活をしながらも、芸術的才能には恵まれているものとしている、と言っている。

第三章においては、前期・太宰治から中期・太宰治への過渡期を問題にしている。取り上げている作品は、「二十世紀旗手」「HUMAN LOST」「富嶽百景」「魔笛と葉桜」等である。この時期、作家像に隷属していた読者が、作家からある意味で独立した存在となり、尊敬を受ける存在にまで変化している、とされる。

第四章では、中期・太宰治文学における読者像の解明に努める。中期とは、広義には、太宰、三十前後から、三十代の中頃までを言う。三十六歳の時、太平洋戦争が終わった。広義に言う中期・太宰治文学とは、この頃までを言う、と言ってもいい。狭義には、中期・太宰治とは、太宰の三十前後から、太平洋戦争が始まった年頃までとされる。中期・太宰治文学の作品として取り上げられているものは、「きりぎりす」「千代女」「風の便り」等である。この時期の読者は、一人前の人格をもつものに変貌し、作品中、重要な位置を有するものとして扱われている、とする。

第五章においては、後期・太宰治文学における読者像が追及きれる。後期太宰治文学とは、戦後の太宰治文学のことと言ってもいい。取り上げられている作品は、「庭」「親友交歓」「父」「斜陽」「冬の花火」等である。論者が問題にしているのは、戦後の社会変化であり、当時の文化活動に対する太宰の絶望である。で、これらに連動し、読者の扱いにも変貌が見られる、とする。

第六章では、「トカトントン」「ヴィヨンの妻」「おさん」「如是我聞」（随筆）等を扱っている。

で、論者は、これらを通し、以下の結論に達したと言う。即ち、結局、太宰治文学における読者像は、現実の太宰治が構想するところの作家・太宰治のその構想に利用されるだけの存在だった。

言語表現において、読者（聞き手）は、書き手（話者）同様、必用欠くべからざる存在である。論者が、太宰治文学における読者像という問題意識をもったことは、そういう点からも興味がもたれる。もっと、こういう研究が過去にあって然るべきだったともされる。また、論者は、膨大な、太宰の作品、太宰に関する研究文献、に具に当たり、論の説得性に努めている。これらからして、本論に高い評価を、私たち審査委員は、全員一致して、与えるものである。ただし、読者像という観点からの研究であるのだから、読者というものの定義をちゃんと行っておいたらもっとよかったろうという意見も、審査委員の中から出された。また、自己の研究方法についての説明、その限界を含めた射程、これらについても、ちゃんと説明しておいたらなおよかったろうという意見も出された。だが、総じては、審査委員全員の一致した意見として、博士号を授与するに価する好論文と判断された。また、最終試験も、全員一致して、合格と判断した。